

高齢者施設 立地どこに (読売新聞 2012年1月22日)

東日本大震災で津波の直撃を受けた山元町の養護老人ホーム「梅香園」と併設施設は、県内の福祉施設で最も多い計82人が死亡・不明となった。うち入所者は59人で、残る23人は自力避難の難しい高齢者を救おうと最後まで付き添った職員たちだ。多くの高齢者を抱える施設の立地はどうあるべきか。「梅香園の悲劇」は重い課題を突きつけている。(石橋武治、蔵本早織)

海から約200メートルの距離にある梅香園は同じ敷地にケアハウスを併設した施設。園側によると、昨年3月11日には入所者が計105人(老人ホーム77人、ケアハウス28人)おり、職員は地震後に駆けつけた人も含め両施設で34人いた。

午後2時46分の地震直後、「6メートルの津波が10分後に到達する」との情報が入ったといい、園は避難も検討したが時間がないと思い、施設西側(内陸側)へ入所者を避難させた。約30分後、施設を訪れた役場か消防の関係者とみられる人に避難を促される。約3キロ離れた内陸側の系列福祉施設へと同施設のマイクロバスなどで移動していた午後3時50分頃、園に津波が到達した。

ある女性職員は、入所者の車いすを押して玄関に向かっていた。「水がきてる」。同僚の叫び声で外を見ると、「20メートルぐらいに見えた」という「水の壁」が迫り、建物ごとのみ込まれた。運良く外の松の木にしがみつことができた。水が引くのを待ち、やはり松林などにすがって助かった職員6人と合流。園屋上で凍えながら夜を明かし、翌日、ヘリコプターで救助された。

移動中のバスも津波にのまれ、助かったのは系列施設に着いた入所者46人と松につかまるなどした職員11人。入所者には車いすの利用者が54人、認知症などで自力避難できない人も23人いた。系列施設との往復に必要な時間は乗り降りを含め30分。施設関係者は「車いすの人もおり、避難させる場所も効率的な方法もなかった」「地震時の災害マニュアルはあったが、津波はほとんど想定していなかった」と振り返る。

町のハザードマップでは梅香園は浸水予想区域の外。県が試算した過去の大地震の推定津波高は、明治三陸地震(1896年)4.9メートル、昭和三陸地震(1933年)5.4メートル。同規模の津波なら高さ6.2メートルの堤防で防げると考えられていた。県長寿社会政策課の担当者も「堤防や松林があり、津波被害はほとんど予想していなかった」。

梅香園は災害への対応や準備が適切だったか検証しているが、看護師の妻を亡くした男性(75)は「入所者を守るために死んだと思いたい。行政、施設への怒りはあるが、自分も津波に対する認識が甘かった。だれかを責められない」とうなだれる。

厚生労働省によると、今年の震災では多くの高齢者福祉施設が被災し、500人近いお年寄りが死亡・不明となり、スタッフにも多数の被害が出たとみられる。

高齢者施設の被害状況を調べている東北工業大の石井敏教授(建築計画学)は「高齢者施設はそもそも避難の必要がない場所に建て、災害時に地域の高齢者を受け入れるための福祉避難所としての機能を持たせるなど、行政が一緒になって体制を築く必要がある」と

指摘。医療や教育とともに福祉施設を中心に据えた街づくり計画を考えるべきだとし、すでに沿岸に立地する施設については「『津波が来たら逃げる』という意識を持ち、ルートや手段を想定しておくべきだ」と話す。